

# 平成29年度全国結核対策推進会議に参加して

盛岡市保健所保健予防課

感染症対策担当 保健師 赤坂 寛子

## はじめに

「2020年の目標に向かって～罹患率10以下を目指した対策の推進～」のテーマで全国結核対策推進会議が開催されたので概要を報告する。参加人数は228名。

## 講演

### 1 「結核低まん延化に向けた今後の対策の方向性」

厚労省健康局結核感染症課 高倉 俊二

2020年までに罹患率10以下を実現するためには、圧倒的に割合が高い高齢者の結核と、外国生まれの結核患者増加への対策が重要なポイントとなる。誰にもうつさない状態で患者を早期発見し、LTBIの治療を確実にを行い発病する確率を下げることができれば、罹患率は確実に減少する。また、患者がより身近な環境で治療に専念できるように、地域の多くの方々に結核の治療や対策について知ってもらうことが重要。

### 2 「世界の結核対策の潮流」 結核研究所 加藤 誠也

昨年モスクワで開催された第1回WHO閣僚級会議について報告。今年9月に開催される国連総会のハイレベル会議につながる会議と位置づけられ、End TB戦略の実施を加速し、2030年までに結核のまん延を終息させるため活動を強化していくことを誓い合った。会議はモスクワ宣言を採択し、成功裏に終了した。

### 3 「わが国の小児結核の現況、課題、そして、新たな取り組み」 国立病院機構南京都病院 小児科 徳永 修

わが国の小児結核症例数は、近年は年間50例前後で推移し、重篤な症例は減少。乳幼児期での高いBCGワクチン接種率の維持が少なからず貢献してきた。

外国籍または高まん延国での居住歴を有する症例が全体の約4分の1を占めるため、転入時の健診を徹底することが重要。また、遷延する咳、反復する発熱、頸部リンパ節腫脹などを訴えて医療機関を受診した際には、結核も念頭においた診療が望まれ、稀少となった小児結核の診療レベルの維持、向上が求められている。

### 4 「結核治療の最新情報」 結核研究所 吉山 崇

2018年の結核病学会の勧告より「ベダキリンの適正使用について」「標準治療を原則PZAを含んだ治療一本にしていくこと」「結核性心膜炎でのステロイド使用勧告レベルを落とすこと」について解説。

また、XpertTB-Rifの普及により、診断時にRFP耐

性の有無が分かるようになったことから、RFP耐性だった場合はINHやSMも同時に耐性である危険性を考慮して治療を検討することについて説明。

## シンポジウム

### テーマ「潜在性結核感染症治療の普及をめざして」

座長 国立病院機構東京病院 永井 英明

総合健診推進センター 高柳 喜代子

1 大阪府結核予防会大阪病院の松本智成氏は、LTBI診断におけるゴールドスタンダードが存在しないという問題点について、将来的には誰が発病に至るかかを判断できればLTBI治療を推進する対象が明確となり、さらに体内の結核菌を根絶できるLTBI治療の開発が進めば、より効率的な対策をとることが可能になると今後に期待。INHの副作用がなく、有効な治療をするためにはゲノム医療が有用であることも述べた。

2 大阪市保健所の津田侑子氏は、外国生まれLTBI患者の検討について発表。日本語学校の接触者健診の経験から、高まん延国生まれの接触者について既感染率の高さを危惧していたが、IGRA陽性率で日本人との有意差は認められず、日本人と同様に健診計画や診断基準を適用してよい可能性について示唆した。

3 総合健診推進センターの高柳喜代子氏は、服薬中断の理由の約半数が副作用の出現がきっかけとなっているのかをアセスメントし、患者のライフスタイルや意思を尊重した診療や支援体制が必要と訴えた。

4 静岡県富士保健所の藤田登志美氏は、富士保健所では全LTBI患者に対して対面式DOTSを実施しており、ショックや不安を抱える診断当日に患者とコンタクトをとり、タイムリーに患者に寄り添うことで、その後の関係性や服薬に対する意欲の向上につながっていると報告。顔が見える関係の重要性を強調した。

## おわりに

会議の最後には、結核対策の各分野で活躍する従事者が、同じ目標に向かってまい進していこう！という空気に包まれた。目標達成のキーワードは「患者中心」であることを忘れず、LTBI診断・治療の普及や、質の高い患者支援のために今回の学びを今後の活動に活かしていきたい。🐾